徳島県立博物館 No. 31

博物館NEWS ニュース

卵を守るヤエヤマムラサキのメス（石垣島、荒川）

今から30年近く前、沖縄県の八重山諸島の石垣島から、メスが卵を守るチョウがいるという衝撃的な報告がありました。それがこのヤエヤマムラサキです。母チョウはイラクサ科のオオイワガネという植物の葉裏に、多いときには数百個の卵をまとめて産み、その上に静止して、卵が孵化するまでそこにとどまり、幼虫が無事に孵ると、母親はそのまま死んでしまうという驚くべき生活をしていたのです。日本のチョウの中で、このような卵の保護をする種は、ほかには知られていません。

これはアリの捕食や寄生蜂などから卵を守るためであると考えられます。アリが近づくと、母チョウはハネを勢いよく開いて、あたかもハネでアリをたたきとばすかのような行動をします。アリだけでなく、近づくものには同様の行動をとり、追い払ってしまいます。

しかし、母チョウが鳥やキノボリトカゲなどに襲われてしまうこともあるようで、母チョウのいない卵塊も見られます。このような卵は幼虫にはなれるようですが、アリなどに襲われて全滅してしまう場合が多いようです。（大原）

大名の婚礼

―3歳で相手が決まっていた―

山川　浩實

はじめに

近世大名の婚礼については、さまざまな記録や婚礼調度などが残されており、儀礼などを調査する大きな手がかりをあたえてくれます。当館が最近収蔵した資料に、蜂須賀家と彦根藩井伊家との間で行われた婚礼についての記録があります。これは婚礼御用を務めた徳島藩の役人の記録で、内約束の段階から井伊家の姫君を蜂須賀家に引き取るまでのようすが細かく記録されています。大名の婚礼そのものの記録はよく見られますが、内約束などに関する記録は、大変珍しいものです。以下、この記録や徳島藩の史料などから、大名の婚礼について紹介したいと思います。

「若殿様御縁組御一巻」について

この記録は、徳島藩の江戸留守居役であった物頭の広岡桝（250石）が、1797年（寛政9）から1805年（文化2）に至る、婚礼前段の8年間を記録したものです。これは藩の命令による正式な記録ではなく、広岡自身の手控え的な記録と考えられます。残念ながら、この記録は、後半の部分が失われていますが、婚礼までの前段のようすを詳しく知ることができます。

井伊家との婚礼

外様大名の蜂須賀家と譜代大名の井伊家とは、17～18世紀に姻戚関係が成立しました。特に、

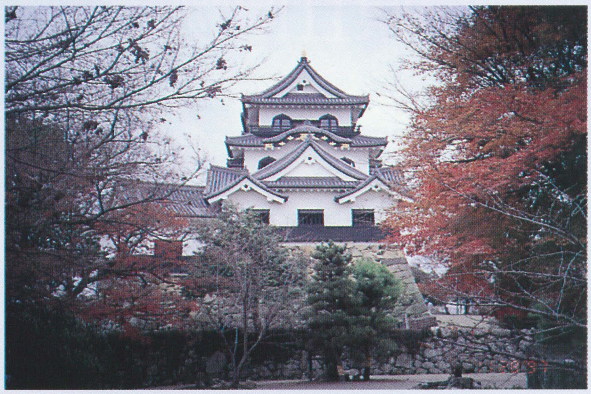


図2　井伊家の居城、彦根城。

18世紀後半には、11～12代徳島藩主の正室を相ついで井伊家から迎えています。井伊家は徳川幕府の大老職に何度も選任された有力大名でした。蜂須賀家がこの井伊家と姻戚関係を求めたことは、幕府の中で強い権限を持った同家を後ろ盾として、多難な時代を乗り越えようとしたことが推察されます。

1797年（寛政9）、11代徳島藩主治昭の嫡男千松丸（後の12代斉昌）と、11代彦根藩主井伊掃部頭直中の長女文姫（後、穠姫）との婚礼が内定しました。この時、千松丸はわずかに3歳で、文姫は6歳でした。大名間における幼少時の婚礼の内定は、武家社会における家の存続を第一に重視したためで、その決定は絶対的でした。

婚礼は、まず最初に両家間で婚姻について合意、約束したことから始まります。これは現在の婚約に相当します。記録では、この段階を「御縁組御内約」としています。すなわち婚礼の内約束です。これを受けて、双方に婚礼御用を務める役人が選任され、この役人を中心として、各種の儀礼や準備が行われました。広岡の記録から、婚礼が決定するまでの過程をみてみましょう。

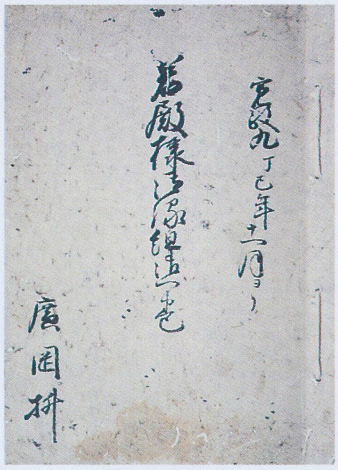


図1　「若殿様御縁組御一巻」。

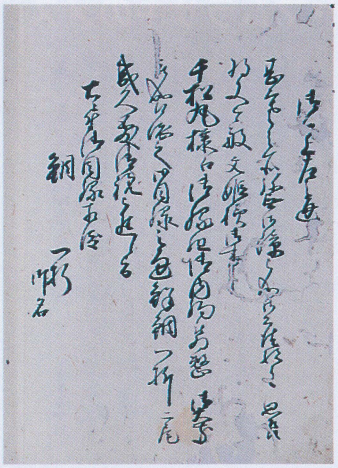


図3　内約束の儀礼として、伊井家へ鮮鯛を贈る。

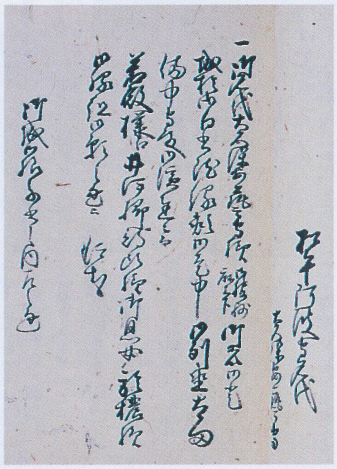


図4　幕府から婚礼が許可される。

1797年

11月・前老中、松平定信に内約束の内諾を得る。

・縁組取計方に広岡桝を任命。

・吉日に井伊家へ鮮鯛一折（2尾）を贈る。

・井伊家から鮮鯛一折（2尾）が贈られる。

12月・井伊家へ鯛・鰈などの交肴を贈る。この時、蜂須賀家の使者、初めて文姫と面会

1798年

4月・幕府に提出する縁組願書の書式を井伊家と定める。

11月・蜂須賀家、7大名の濃い親族に内約束について相談。

・蜂須賀家、縁組願書を老中へ提出。

12月・老中より正式に婚礼が許可される。

・蜂須賀家、国元へ歓びの飛脚を送る。

・井伊家より祝儀として、干鯛が贈られる。

・同日、井伊家へ祝儀として、干鯛を贈る。

1799年

1月・蜂須賀家、幕府の許可に対し、若年寄・大坂城代・京都所司代へ謝礼の使者を送る。

大名の婚姻は自由ではなく、武家諸法度によりすべて幕府の許可を必要としました。その理由は、婚姻によって有力大名が結びつき、幕府に対抗する大きな勢力となることを避けるためでした。蜂須賀家は幕府の許可を得るため、いち早く蜂須賀家の濃い親族で、寛政改革を行った幕府の実力者松平定信に内諾を取り付けました。これ以後、両家間で儀礼や交渉、準備が行われ、1年後に幕府から婚礼が許可されました。その後、西国大名の動きを監視する大坂城代や京都所司代へ謝礼の使者を送り、ほぼ幕府との関係を終了させました。

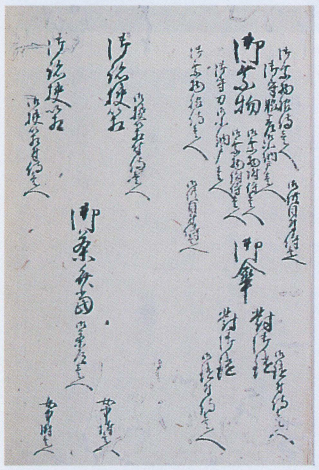


図5　穠姫の移転の行列が検討される。

婚礼が正式に許可されると、準備が本格化しました。以下、広岡の記録と徳島藩の史料（「阿淡年表秘録」）から、婚礼までの過程をみてみましょう。

1805年

・両家で親族の続書を取り交わす。

・婚礼の日取りを決定する。

・婚礼調度を定める。

・幕府より穠姫の引き取りが許可される。

・穠姫、移転（14歳）。

1808年

・結納。

1809年

・千松丸、元服（15歳）。昭昌、のち斉昌と名乗る。

1810年

・婚礼。

この時、昭昌は16歳で、穠姫は19歳でした。穠姫は早くから蜂須賀家へ引き取られ、婚礼までの5年間を江戸の上屋敷の藩邸で過ごしました。徳島藩主の正室で、穠姫のように、婚礼前から蜂須賀家へ引き取られた例はまったくありません。穠姫の引き取りは、井伊家との婚礼に固執した蜂須賀家の意図がよく現れています。

穠姫は婚礼後も、上屋敷の藩邸で居住しましたが、1820年（文政3）、29歳で病死しました。12代藩主となった斉昌は子どもがなく、そのため正室の死から9カ月後、公家から継室を迎えて再婚しました。

おわりに

このように大名の婚礼は、武家社会のもとで家の存続が第一に重視されため、幼少時から婚礼の準備が進められました。蜂須賀家の場合、千松丸以外でも、5～6歳で婚礼が内定、決定した例がありました。準備の段階では、婚礼について幕府の許可を得ることが最大の関門で、これが正式に許可されると、準備が本格的に行われました。

なお、広岡の記録から、これ以外にさまざまな婚礼調度を知ることができますが、これについては別の機会に紹介したいと思います。

（人文課長：歴史担当）

野外博物館

愛媛県土居町　関川河原

徳島市眉山～高越山～大歩危～愛媛県別子銅山にかけての地域は三波川帯に属していて、高圧低温型の変成岩（結晶片岩類）が露出しています。四国の中央部に位置する愛媛県の東赤石山一帯は、三波川帯の中でも特に変成度が高いことやマントル起源の岩体（かんらん岩）が大量に分布していることが特徴で、変成岩や構造地質学の研究者の間では非常に有名です。地形はかなり急峻で、東赤石山の標高は1707mもあります。

この周辺の岩石は、珍しい鉱物や大型の鉱物を含んでいます。ある特定の鉱物や新鮮な標本を採集するには険しい山の中へ入らなければなりませんが、もっと手軽に採集できる場所もあります。それは、関川（東赤石山を上流域とする川）の河原です。四国の中では、標本としておもしろい鉱物が最も手軽に拾える場所で、運と観察力があれば、何種類もの珍しい鉱物が見つかります。そこで、愛媛県内の博物館では毎年のように採集会や観察会を行っているほか、全国から鉱物コレクターがやってきます。ここでは、この地点の代表的な鉱物と岩石をご紹介します。

鉄ばんざくろ石：ここで最も簡単に見つかる鉱物です。普通角閃石（暗緑色）と灰簾石（灰色）主体の岩石（角閃岩）の中に、数mm～4cmほど（多くは径1cm程度）のコロコロした赤っぽい自形結晶として入っています（図1）。母岩が風化しかかったものを慎重に割れば、分離結晶を得ることもできます。

アクチノ閃石：長柱状で緑色の鉱物です（図2）。白色の滑石を伴っているものはかなり大きくなり、長さが5cm以上に達します。

エクロジャイト：赤と緑のまだらの岩石で、赤い部分は苦ばんざくろ石、緑色は単斜輝石です（図3）。玄武岩質の岩石が地下のかなり深いところで変成されたものです。たいへん重い岩石で、比重はなんと3.4ほどもあります。

採集には、JR予讃線伊予土居駅から1kmほど北の河川敷（テニスコートなどが設置されている：図4）が最も便利です。川にある程度の水流があれば、礫の表面が洗われてたいへん見やすくなります。　（地学担当　中尾賢一）

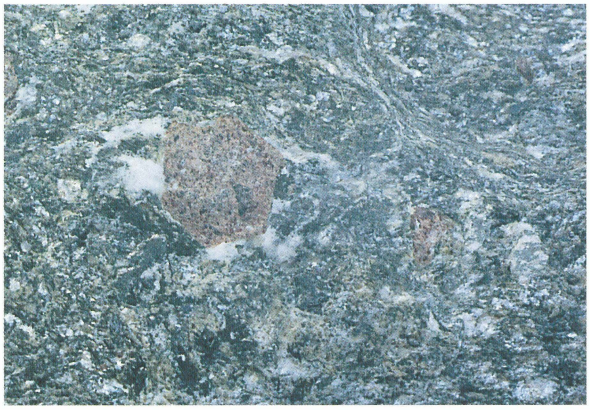


図1　鉄ばんざくろ石　結晶の長径約1.6cm

図2　アクチノ閃石　左右約7.5cm

図3　エクロジャイト　左右約15cm

図4　関川河原（昨年の行事「鉱物さがし」時に撮影）

平成10年度第2回企画展

チョウとガ ―ウロコをもった昆虫たち―

昆虫の中で、甲虫類に次いで、2番目に種数の多いのが、チョウとガのなかまです。現在までにおよそ17万種が知られており、きわめて種数の多いグループなのです。日本では約5千種ほど知られています。このグループを鱗翅目（りんしもく）と呼びますが、少しむずかしいので、文部省などで定めた生物の分類表などには「チョウ目」あるいは「チョウ・ガ目」となっています。

鱗翅目というのは、ハネにウロコをもった昆虫、という意味があり、このグループを示す分類学の用語であるLepidopteraを日本語に訳したものです。Lepido-はウロコで、-pteraはハネを意味するギリシャ語からきています。

このなかまの一番の特徴は、ウロコ状のものでおおわれた体です。その一つ一つが鱗粉（りんぷん）とよばれ、扁平でウロコのような形をしています。もともとは1本1本が毛なのですが、それが平らになり、複雑な構造を持つウロコ状のものに変形しています。このウロコ状のものがびっしりとハネを覆っていて、それぞれに色があったり、光を反射することによって、あのような美しいハネの模様を作っているのです。

もう一つの特徴は、口の形状です。植物と密接に関係した生活をおくるこのなかまは、ゼンマイ状になった口器をもっていて、噛む口から吸う口へと進化を遂げたグループなのです。この口の形状は99.9%の種にはあてはまるそうですが、ごく少数ながら、今でも噛む口をもったガもいます。

今回は、このチョウとガのなかまの標本をできるだけたくさん展示し、どのようなチョウやガがいるのかを皆さんに知っていただきたいと考えています。

●主な展示資料

世界の大型ガ類標本
小さなガと大きなガ
日本産チョウ類標本（ほぼ全種）
徳島県のチョウ
東南アジアのチョウ
南米のチョウ
沖縄のシロオビアゲハの擬態
リュウキュウムラサキの地域ごとの標本
海を渡るチョウ：アサギマダラ
など多数の標本

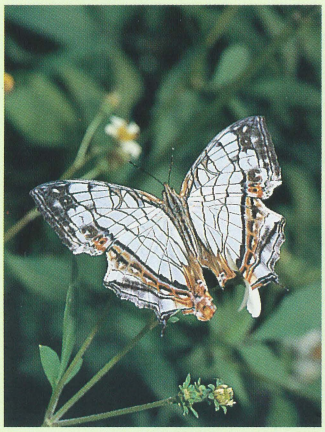
●会　期　1998年7月18日（土）～8月30日（日）
※休館日 7.21(火)、およびそれ以降の毎月曜日

●会　場　当館企画展示室

●観覧料　一般200円／高校・大学生 100円／小・中学生50円（20名以上の団体は2割引き）

関連行事

展示解説
日　時　7月25日（土）14：00～15：00
会　場　企画展示室（観覧料必要）
講　師　当館学芸員


イシガケチョウ

アサギマダラ

リュウキュウムラサキ

情報ボックス

ちょっと美味しい話

日本の食卓のレギュラー的存在、味噌。今ではパック入りでスーパーなどに並んでいますが、戦前までは農家なら自家製が普通でした。

図1　現代の美濃焼「味噌焼き皿」
（河三味噌本舗　協力）

さて、ここにちょっと変わったうつわがあります（図1）。お猪口（ちょこ）くらいの大きさですが、脚の部分に二つの穴があいています。これは何だと思われますか？実はこれ味噌を焼くためのうつわなんです。皿の部分に味噌をぬり付け、脚の穴には火箸か針金を通します。そして、逆さにつるして火鉢やコンロであぶるのです。焼くことおよそ5分でご飯のおかずの1品に。香ばしいかおりが食欲をそそります。

この「味噌焼き皿」は徳島ならではのもので、20年ほど前までは味噌屋さんが特別注文で美濃焼の窯元に作らせていました。それを贈答用の味噌樽にサービスで付けていたのです。年配の方ならご存じの方も多いと思われますが、今は需要もなく、もう味噌焼き皿は作られていないということです。

徳島市の中心部は、江戸時代には徳島藩の城下町でした。その地下を掘ると、当時の町並みが出てきます。現在、徳島大学の工学部が建つ常三島地区は、武家屋敷が軒を連ねる武士の町でしたが、ここで発掘調査を行った際、江戸時代の味噌焼き皿がみつかりました（図2）。皿の部分は欠けてなくなっていますが、脚にあいた二つの穴がはっきり見えます。最初は何に使われたものかわからず首をひねっていたのですが、郷土書を読んでいてやっとわかりました。大きさは脚の直径4cmほどで、現代のものより大きめです。生産地は不明ですが、おそらく近隣の窯場で焼かれたものでしょう。この出土品から、江戸時代の食卓にも焼き味噌が並んでいたことが証明されました。阿波名物の焼き味噌は、江戸時代からの歴史を誇る郷土料理だったわけです。

図2　常三島遺跡出土「味噌焼き皿」
（徳島大学埋蔵文化財調査室　協力）

最後に、1849年（嘉永2年）創業、徳島市南新町の「河三味噌本舗（かわさんみそほんぽ）」の平土冨江（ひらどとみえ）さんからうかがった、美味しい味噌料理をいくつかご紹介しましょう。まず、焼き味噌は添加物を含まない白味噌を使用するのが一番。冷や奴にはひしおと呼ぶ少し辛めの味噌をのせてスダチをかけるとまろやかな味わいに。夏場が旬のキュウリにも、このひしおを添えるとおいしいモロキュウができあがり。博物館職員にも、昔は焼き味噌を食べたという人がいました。この人の場合は、半分に切ったユズやダイダイの皮に味噌と果汁を混ぜたものを入れて、火鉢で焼いて食べたそうです。冬場の味覚ですね。

失われつつある郷土の食文化を見直すことは、インスタント食品に囲まれている現代人の健康を考えるうえでも大事なことかもしれません。今夜の献立に、季節感のある素材を使った味噌料理はいかがですか。（文化推進員　北條ゆうこ）

図3　贈答用味噌につけられた「味噌焼き皿」
（河三味噌本舗　協力）

レファレンスQ&A

Q. 徳島市佐古の浄水場にあるという縄文～弥生時代の遺跡のことを教えてください。

A 佐古の浄水場にある遺跡（浄水場遺跡）は三谷遺跡とも呼ばれ、縄文時代から近世にかけての遺跡として知られています。最初にこの遺跡の内容が明らかになったのは、1924年10月に行われた徳島市の水道濾過池の掘削工事のときでした。このときに地下の粘土層から見つかったのは、縄文時代の貝塚や、縄文～弥生時代の竪穴でした。縄文時代の竪穴と貝塚からは縄文土器や石器（石斧、石槍、石錐、石棒など）が、弥生時代の竪穴からは弥生土器（甕箪形の壺など）や石器（石斧、石槌、石臼など）が発見されました。そのほかにも、楠の大木をくりぬいて造られた長さ4.5mくらいの丸木船と思われるものも発掘されました。この発掘品については、現場へ足を運んだ鳥居龍蔵博士（徳島市出身の考古学・民族学者）が、大阪毎日新聞紙上に「阿波徳島の原始独木船」いう表題の記事を数日にわたって掲載したこともあり、大いに注目されました。

しかしながら、このときに浄水場遺跡から発見された資料については散逸してしまい、現在どこにあるのかわかっていません。当時、遺物が発見された付近には、西欧風の煉瓦づくりの建物が建てられ現在に至っています（図1）。

その後、この遺跡は最近まで調査されることなく眠ってきましたが、水道局の拡張工事のため、1990・1991年の2年間にわたって徳島市教育委員会が発掘調査を行いました（図2）。じつにほぼ70年ぶりの調査となりました。

この発掘では、地表から1.9m掘り下げたところから、弥生時代中期～江戸時代の建物、土坑、溝などやそれらに伴う遺物が発見されました。さらにそこから0.3～0.8m掘り下げたところで、縄文時代晩期～弥生時代前期の小さな貝塚が3箇所見つかりました。貝殻の大部分はヤマトシジミとハマグリでした。これらは河口や内湾の干潟にすんでいる貝です。その中に混じって、おびただしい量の縄文土器、弥生土器、石器、骨角器、魚骨、獣骨（シカ・イノシシ）などが見つかりました。炭化したドングリやコメ、埋葬された7体のイヌの遺骸なども発見されました。

図1　1924年の調査後に建てられた佐古浄水場

貝塚部分の調査では、掘り上げた貝混じりの土はすべて採集され、フルイを使った洗浄が行われました。その結果、相当小さな魚骨や骨角器なども採集することに成功しています。これらの資料を調べることによって、縄文時代から弥生時代への移り変わりの時代（約2300年前）に徳島に住んでいた人々のくらしぶりが徐々にわかってくるのではないかと考えています。

最近になって、徳島県でも沖積低地での発掘調査が進み、縄文時代後期以降の遺跡の発見例や調査例が増えてきています。しかし、他地域に比べると縄文時代の遺跡は少ないのが実状です。とくに貝塚に関しては、この浄水場遺跡以外には、徳島市の城山貝塚と鳴門市の森崎貝塚が知られているくらいです。

約70年前に調査され、詳しい内容がわからなくなっていた佐古浄水場遺跡について、再び調査が行われ、貝塚が確認されたことには大きな意義があると思われます。　（考古担当　高島芳弘）

図2　1990年の貝塚の調査風景

7月から9月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行事名	実施日	実施時間	対象（人数）
野外自然かんさつ	夜の雑木林	7月25日（土）	19：30～21：30	小学生から一般（25名）
	水生昆虫のかんさつ	8月 1日（土）	10：00～12：00	小学生から一般（35名）
	河口のいきもの	9月 6日（日）	11：00～13：00	小学生から一般（70名）
	鳴く虫のかんさつ	9月12日（土）	19：00～20：30	小学生から一般（25名）
	秋の野山を歩こう	9月20日（日）	10：30～14：00	小学生から一般（30名）
土曜講座	※デジタル植物写真の世界	7月11日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
	※チョウとガの擬態	8月 8日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
	※現存天守と絵図でみる徳島城	9月12日（土）	14：00～15：00	小学生から一般（50名）
歴史散歩	用水探検	9月13日（日）	10：00～12：00	小学生から一般（20名）
体験学習	火おこし	8月 9日（日）	10：00～12：00	小学生から一般（30名） 小学生は保護者同伴
室内実習	植物カルタを作ろう	7月19日（日）	13：00～16：00	小学生から一般（30名）
	植物標本の作り方・名前の調べ方	8月 2日（日）	10：00～16：00	小学生から一般（30名）
	かんたんな貝の標本のつくりかた	8月22日（土）	14：00～16：00	小学生から一般（40名）
	※標本の名前を調べる会	8月26日（水）	10：00～16：00	小学生から一般 （動物・植物・化石・岩石・鉱物等）
企画展関連行事	※展示解説	7月25日（土）	14：00～15：00	企画展「チョウとガーウロコをもった昆虫たちー」観覧料必要（50名）
移動博物館	※講座「矢じりのはなし」 「地層を読む」	7月26日（日）	13：30～16：00	小学生から一般（100 名） 会場：脇町福祉センター
	※講座「吉野川の魚」 「中央構造線のはなし」	8月23日（日）	13：30～16：00	小学生から一般（100名） 会場：脇町福祉センター
	※講座「霊山と山伏」 「池月伝説と吉野川」	9月27日（日）	13：30～16：00	小学生から一般（100 名） 会場：脇町福祉センター

●※は申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。（各行事の１カ月前から10日前までに届くように）
●くわしいことは博物館にお問い合わせください。

****

求む！　ボランティア　あなたの町のメダカをさがして！

徳島県立博物館では県内のメダカの生息調査をすすめています。調査地域が県内全域にわたるため、わずかな人数の博物館スタッフだけでは、とても調査しきれません。

調査といっても、とっても簡単です。あなたのご自宅周辺で、メダカを探してください。それを採集し、博物館へ返送していただくだけです。参加者には、こちらから「調査の手引き」・「調査マップ」・「標本ビン」などをお送りします。

メダカは北海道を除く全国に分布していますが、近年の急速な環境の変化に伴い、生息地が少なくなりつつあります。ほかの県ではすでに「絶滅危惧種」に指定されたところもあります。徳島県では、メダカはまだ身近でありふれた生き物ですが、10年後・20年後はそうではないかもしれません。今のうちにメダカの生息状況をできるだけ正確に記録し、環境の変化をモニターする必要があります。

調査の結果は、「博物館ニュース」や「アワーミュージアム」（友の会会報）などで発表していきます。ご参加をお待ちしています。

申し込みをされる方は、お名前・ご住所・電話番号をお知らせください。博物館受付、郵送、ファックス、Eメイルのいずれかでお願いします。

送り先
〒770-8070　徳島市八万町向寺山
徳島県立博物館　メダカ調査係
FAX: 0886-68-7197　Eメイル: sato@staff.comet.go.jp

博物館ニュース　No. 31
発行年月日　1998年6月25日
編集・発行　徳島県立博物館
〒770-8070　徳島市八万町向寺山　☎0886-68-3636